ウズベキスタン政府及び科学アカデミー主催 第一回科学国際会議に出席して

八戸工業大学地域産業総合研究所　四　竈　樹　男

平成 28 年 11 月 10 ～ 11 日の二日間にわたり、ウズベキスタン政府及び科学アカデミー主催、第一回科学国際会議にウズベキスタン政府よりの招待を受けて出席しました。正式な会議の名称は、“International Symposium, New Trends of Development Fundamental and Applied Physics: Problems, Achievements and Prospects”（基礎及び応用科学の新たな動きに関する国際会議、課題、成果、今後の展開）です。

ウズベキスタンは正に絹の道（シルクロード）の中央、中央アジアの広大な草原に位置する内陸国であり、約 3000 万人の人口と、日本より 2 ～ 3 割程度広い国土を持ち、古い歴史に育まれた国で、1991 年に旧ソビエト連邦より独立しました。（図 1）古い歴史を持ちながら、新しい国として、現在、国の進むべき道を模索しているようです。下にウィキペディアより引用したウズベキスタンの地図を示します。（Wikipedia、ウズベキスタン）

図 1　ウズベキスタンの地図。（Wikipedia ウズベキスタン）

私自身を含め、「スタン」を最後に含む国々が旧ソビエト共和国連邦の南部中央部にあることを漠然としか知らないのが通常の日本人と思います。複雑な国境線を持ち、多数の国に取り巻かれた状況から、複雑な歴史背景と現在の国際環境を垣間見ることができます。北側に大きく広がるカザフスタンのユーラシア国立大学（L.N.Gumilyov Eurasian National University, アスタナ市）　とは現在八戸工業大学が学術交流関係を築こうとしています。

地図を見て実感したのは、これまで世界史の中で絹の道に関係して言葉しか知らなかった、「フェルガナ盆地」、「サマルカンド」、「アムダリア、シムダリアの大河」ソビエト期の環境破壊の象徴とされる「アラル海」などがその版図に含まれ、まさに往年の絹の道の中心を占める国であるということです。更には、アフガニスタンに接し、インドへの道も開かれており、国の右端には中国の西域が間近に迫っており、イラン、カスピ海を通して、中近東は目と鼻の先になります。

このような環境の中で、絹の道に関わる古い歴史、芸能、それと、やはりこれも古い歴史を持ち、いわゆるイスラム・ルネサンス（中国の宋、及びヨーロッパのルネサンスの源流となったもの）以来の伝統を持つ、天文学及びそれに関連した基礎物理学を、国の背骨の一つと位置づけ、それらの振興を、国を挙げて図っているようです。

本会議へは 55 か国から 300 人を超える科学者を招聘し、2 日間に渡る濃密な会議が、副総理大臣来席の下、首都、タシュケントの科学アカデミー、及びウズベキスタン国立大学で開催されました。

写真１　国立科学アカデミーの会場の様子

すべてが、国の丸抱えで、出席者はVIP待遇で遇され、未知の国への旅行の不安は、首都のタシュケント国際空港へ飛行機が着陸したまさにその時に解消されました。

会議は、国が振興する、宇宙天文物理、基礎物理を中心に行われましたが、関連した、物性物理、新素材開発関連のセッションも設けられ、私はそこでの発表の機会を頂きました。日本からは基礎物理の第一人者が、東京大学、北海道大学、名古屋大学、筑波大学、慶応大学（招待者は同大学に所属するイタリア人）、より招聘され、私もかなり専門がずれているとはいえ末席に列することができました。会議の概要を図２に示します。

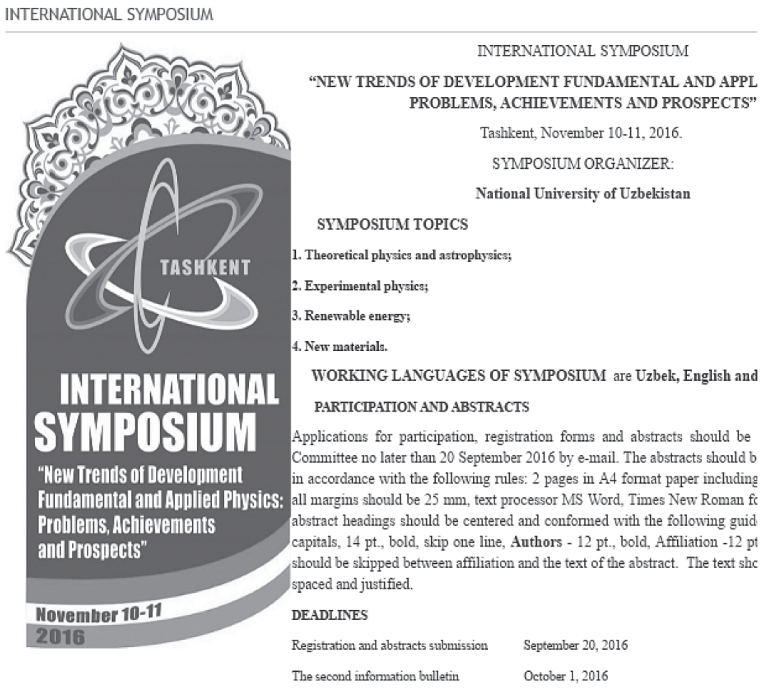

図２　会議概要

会議期間中は、様々な同国の歴史文化に触れる機会を頂き、会議終了後の 12 日には新幹線で古都サマルカンドまで出向き、シルクロードを中心とした古い歴史に触れることが出来ました。

印象に残ったいくつかを報告させていただきますが、まず、首都タシュケントは近代的な大都市であり、新しい国ながら、その背景の古い文化と歴史を自負していることです。特に、モンゴル帝国が分裂した後の 14 世紀にこの地から出て、新たな国際帝国を築き上げたティムールは国の英雄として崇められています。写真 2 にタシュケント中央部の広場にあるティムール像を示します。

写真 2　タシュケント市内のティムール像

また、本会議の主催の大きな理由である、ティムールの孫がヨーロッパ・ルネサンスの前に作り上げた大規模天文観測所を写真 3 に示します。これは、古都サマルカンドの中心部の小高い丘に建設されたものです。

写真 3　イスラム・ルネサンスに建設された大規模天文観測施設

最後になりますが、絹の道の雰囲気を味わっていただく一枚として、サマルカンド中心部の世界で最も美しいとウズベキスタンが自負するイスラム建築群を示します。（写真 4）

写真 4　サマルカンド中心のイスラム寺院

本会議の成功を見て、ウズベキスタン政府は、この国際会議を第一回として引き続き、2 － 3 年に一度継続して開催することを計画しているようで、サマルカンドの写真 4 の広場で数年に一度大規模に開催される、中央アジアの歌唱コンクールと併せた、二大国家イベントとしたいようでした。

本会議に出席するにあたりましては、タシュケント国立大学の実行委員会、ウズベキスタン大使館等から篤いご援助を頂きました。本会議への招待の労をとってくれた、私の共同研究者でもある、チューリン工科大学の Maksudbek Baydjanov 博士（写真 5）、及び、この会議への出席をご許可くださった長谷川明八戸工業大学学長にも御礼申し上げます。

写真 5　Maksudbek Baydjanov 博士と会場前で